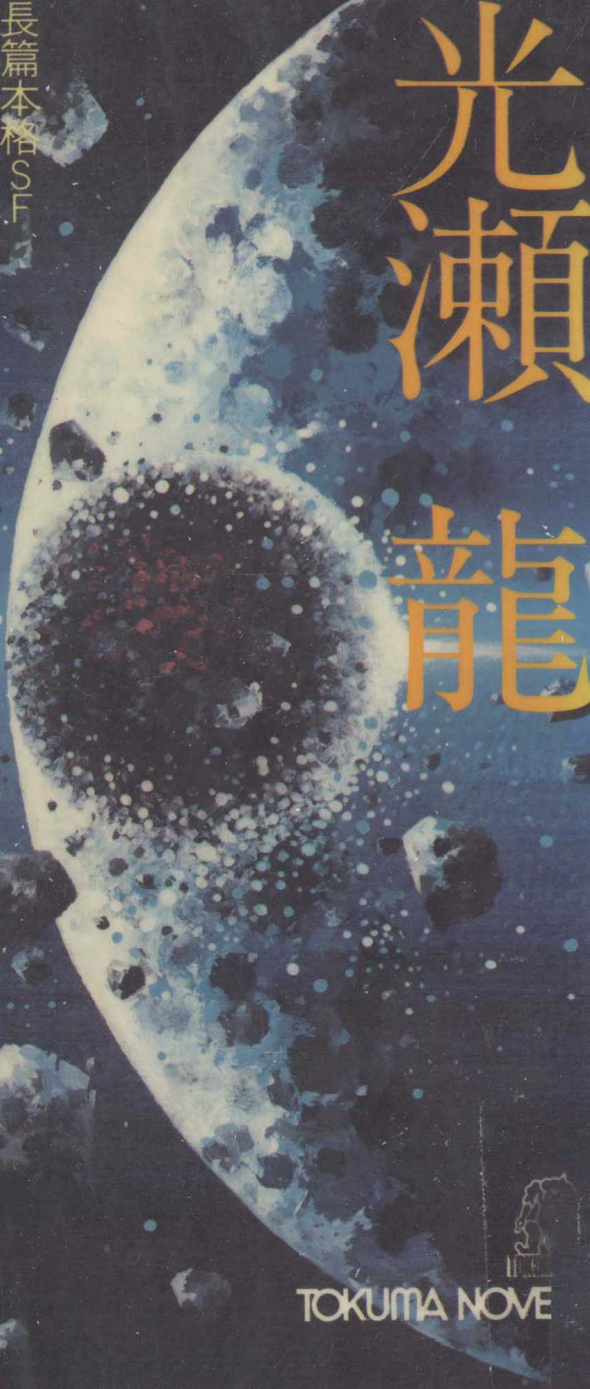
かれら星雲より

長篇本格SF

光瀬龍



TOKUMA NOVE

TOKUMA NOVELS

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四—四四三九二一

光瀬　龍
かれら星雲より

Ryū Mitsuse ©1981
カバー画　金森　達　デザイン　矢島高光
本文挿画　金森　達
落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当　前島不二雄〉

長篇本格SF

かれら星雲より

光瀬龍

TOKUMA NOVELS

かれら星雲(せいうん)より

光瀬(みつせ) 龍(りゅう)

オペラの第一人者光瀬龍は、知る人ぞ知るコーヒー通だ。
流れ、サイフォンで淹れる。
香りが部屋に満ちるとき、卓抜なアイデアが浮かぶのかも知れない。
該博な知識で裏打ちされた本書は、
君の熱狂で迎えられることだろう。

TOKUMA NOVELS

0293－152152－5229　定価680円

長篇本格SF

かれら星雲より

光瀬 龍

徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

かれら星雲より

I

その日、観測船《オリオン2》と、補給船《アナクレオン11》は、遭難、除籍と発表された。

はずした装具やバッグを提げて、宇宙船乗組員（スペース・マン）たちが集会所の前を通りかかった時、壁にはめこまれている銅板のスペース・マン名簿から、管理部の連中が、この二隻の船の乗組員（クルー）たちの名札をはずしているところだった。

スペース・マンたちは、しばらくの間、突っ立ってそれを見ていた。誰もものを言わなかった。

《オリオン2》の方は十二枚。《アナクレオン11》の方は三十枚以上ある。

三百枚ほどの名札の列の二カ所に空白ができ、コンクリートの灰色の粗面があらわれた。

管理部の連中は、はずした名札をまとめて無雑作に箱に投げこむと、それをかかえてさっさと行ってしまった。

箱の中で名札の鳴る音が、やがて回廊を曲って聞えなくなった。

かれらは、こんどはその名札を、宇宙空港（スペース・ポート）の、開発記念碑の台座にはめこむのだ。

そして集会所の壁には、新しい名札が掲げられる。

それだけだった。

むかしは、このような時には、そのつど集会が開かれ、花環をささげて、歌ったり、弔銃を射ったりしたものだという。だが、今では、そんなことを知っている者もいない。

名札をはずされた連中は、そこに立っているスペース・マンたちの誰彼の友だちであり、なかまたちだった。

みな、それぞれの思いを抱いて、壁の前を離れた。

そこから名札をはずされるのは、誰も、早いか遅いかの違いだけだった。自分の名札の掲（かか）っていた所に、見知らぬ若者の名札が掲げられる。

ただ、それだけのことだった。

木星以遠の惑星の位置が、最良の配置になっているので、大圏航路（ソーラーコース）の辺境コースはにぎわっている。太陽系連合の、いわゆる官営輸送機関のほか、さまざまな組織や施設の持ち船やチャーター船までいっせいに動

いている。あと半年ほどたつと、天王星と冥王星の位置が大きくずれてしまうので、今のうちにというわけだ。実際、大量の建設資材や、マンモス・ドックのようなものは、時期が過ぎてからの半分の経費で送ることができるといわれる。それに、地球や火星から辺境へ送るのにつごうがよいというだけでなく、それぞれの外惑星の間のコースも、最短距離を通って飛行(フライト)することができるというので、どの基地も多忙を極めていた。

地球と月の間の定期航路用のフェリーや、地球と金星の間を結んでいる専用貨物船(バケット)までかり出されているという。

船の方はともかく、絶対的に足りないのは乗組員だった。船は定期航路用のフェリーでも、その乗組員は使えない。曳舟(タグ・ボート)まがいのチャーター船でも、木星や天王星までは行けるが、それはベテランの舟乗り(スペース・マン)が乗組んでいる場合に限るのだ。金星の専用バケットに乗込んでいる荒くれ男たちでも、外惑星航路となると、かなり勝手が違うだろう。いちばん大きな違いは、金星では太陽はつねに巨大な光球となって頭上にかかっているが、冥王星で見る太陽は、無数の星くずの中にまぎれこんで、それと見分けることも困難だ。大圏航路でも、金星や水星へ向う内惑星コースは、つねに太陽のすさまじい熱や放射線から船体を守らなければならないが、辺境コースの専従スペース・マンたちは、もう太陽なぞ忘れてしまっていた。

《連合鉱産資源局九号船乗組員(クルー)は、ただちに宇宙空港(スペース・ポート)第三フィンガー待機所に集合》

《連合二五一便乗組員(クルー)はミーティングをおこなう。二〇・〇〇。第五ドックに集合》

《観測船、カサンドラ・プラス・ワン。乗組員(クルー)は、ただちに所定の手続きを終え、宇宙観測機構委員会公室へ集合せよ》

《連合宇宙補給部、補給船、アナクレオン33。出港八時間前》

《ルナ・シティ委員。テレ・タイプが入っています。C8テレノ・ボックスへどうぞ》

さまざまなアナウンスが交錯する。その中から、自分に関係のあるものを聞き取るだけでもたいへんだ。

居住区へ引き揚げてきたスペース・マンたちは、壁のスピーカーからたえ間なく洩れてくるアナウンスに、

顔を見合わせた。
「観測船の《カサンドラ・プラス・ワン》は遭難した《オリオン2》の代りに、観測作業に向うそうだ」
「《オリオン2》の代船というと、太陽系外へ出て行くんだろう。もう三隻ぐらい遭難しているんじゃないかな？」
「いや、四隻だ。《カサンドラ・プラス・ワン》で五隻目だ」
「かわいそうに、それにくらべれば、大圏航路での屑鉄運びは天国だ」
「運が悪い奴がいてくれなければ困るよ」
スペース・マンたちは、それぞれのベッドに這い上って体を投げ出した。任務から解放された今は、そのささやかな幸運をこそ喜ぶべきだった。
《第七食堂は一九・二〇、オープンする》
「たまには定刻に開いてもらいてえもんだ。民生部は、いってえ何をやっていやがるんだ」
《人事部予備登録。2級甲板員。フサ51。ただちに宇宙観測機構委員会公室へ出頭せよ。人事部予備登録。2級甲板員。フサ51。ただちに宇宙観測機構委員会公室へ出頭せよ》
みなが頭をもたげた。
「宇宙観測機構委員会だと？」
「ただちに出頭ときたぜ」
「おい、ありゃあ、《カサンドラ・プラス・ワン》の乗組員に欠員が出たんだぜ」
「その補充か？」
「たぶんな。人事部予備登録となれば、欠員の補充だぜ。きまってらあな」
「そいつは気の毒だ。さんざん出番を待たされたあげくが、太陽系外の観測とはな」
「2級甲板員というのはめずらしいな。甲板員がなんでこんな所でうろうろしているんだ？」
「2級甲板員といえば、宇宙船技術学校の初級卒業取得資格だ。乗れるとすればせいぜい内航航路だろう。ここまで航客で来たのか？」
笑い声がわいた。
一人が上体をひねって、みなの方を向き直った。
「おれ、そいつの話、聞いたよ。きのう、食堂で人事部のやつがしゃべっていた。降格されたらしいぜ」
みなの顔が集中した。
「降格？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

「何かやらかしたのか？」
「さあな。むかしは主席宙航士だったんだとよ」
「へえ！　てえしたもんじゃねえか。それが今は2級甲板員とはな。ああ、いやだ、いやだ！　それならいっそ重禁固の方がずっといいぜ。そいつもばかだな。やめちまえばいいのによ。何も2級甲板員に格下げされてまでへばりついているこたあねえじゃねえか。なあ」
「そうともよ」
《……人事部予備登録。2級甲板員。フサ51。ただちに宇宙観測機構委員会へ出頭せよ……》
スピーカーが呼びつづけていた。
「何やってやがんのかな？　逃げちまったんじゃねえのかい」
それが大あくびとなった。
そのとき、二ダースほどならんだベッドの一番端で起き上った者があった。
こちらのあくびに合わせるように、間のびした咆哮を放ちながら、両腕を天井へ突き上げた。それから体中をぼそぼそ掻くと、不器用なしぐさで、上段のベッドから床に降りた。足先で靴をさぐると、そのままだらしなく靴を引きずって、ドアへ向って体を運んでいった。
みなは顔を見合わせた。
「誰だ？　あれは？」
「あれだろう。宇宙観測機構がご招待しているやつは」
「名誉ある2級甲板員どのか」
顔もよくわからなかったが、全身が弛緩したような感じの、薄汚ない男だった。スペース・マン特有の、刃物のような鋭さがない。
彼は背を丸めて回廊へ出ていった。
みなは、疫病神でも目にしたかのように、口を閉ざし、舌打ちを洩らしたりして、その男が消えてゆくのを見送っていた。
「人事部予備登録。2級甲板員。フサ51。宇宙観測機構要員補充者として、人事部登録局から書類が送られてきた」
宇宙観測機構の制服を着た男が、デスクの向うで横柄な口をきいていた。
宇宙観測機構それ自体は、太陽系連合内でたしかに

極めて大きな権威を持つが、その制服（ユニフォーム）には別に何の付加価値もない。
「この記録の内容に、われわれは何の興味も関心も持たない。要員補充者としてのおまえの仕事は、観測船の乗組員だ。やるか？」
面倒臭そうに、書類から顔を上げた。
「ああ」
フサはうなずいた。
「よし、と。ことわる奴はいないよな。観測船の乗組員の欠員なんて、めったにあるもんじゃない。これは乗船手当が特Aだからな。2級甲板員（セカンド・デッカー）だって、大圏航路の定期船の水夫長（ボースン）ぐらいもらえるんだ。もっとも生きて帰ってこられればだが」
最後の部分は、つばを吐くのと同じ調子だった。
「それで、どうすればいいんだ？」
「この書類を持って、すぐ委員会公室へ行け」
男は分厚い書類をフサの前へ投げてよこした。
「どこだ？　その委員会公室とかいうのは？」
「そのドアを入って、真直ぐ行くと、右側にある」
フサはドアを押した。長い廊下がのびている。
「2級甲板員（セカンド・デッカー）！」
男が呼び止めた。
「おれのことか？」
「おまえのほかに、ここに2級甲板員（セカンド・デッカー）がいるか？」
「名前を呼べ」
「2級甲板員（セカンド・デッカー）だから2級甲板員（セカンド・デッカー）と呼んで何が悪い」
フサはくちびるをゆがめた。
「2級甲板員（セカンド・デッカー）というのは、宇宙船乗組員の船内組織の上での階級だ。そうだろう。2級甲板員（セカンド・デッカー）。違うか？」
「違わない」
「当り前だ。何もひがむことはない。それとも、そう呼ばれて腹を立てるようなわけでもあるのか」
「用があるなら早く言え！」
「こんど来る時は、シャワーを浴びてから来い。おまえ、臭いぞ」
フサは黙ってドアをしめた。
リノリウムの床に、自分がさかさまに映っていた。
両側にならんだドアの奥はしいんと静まりかえっている。実際には、内部は、テレタイプやコンピューターの電子音で騒然としているのだろう。
右側に、公室と記されたドアがあった。
ノックすると、ドアは音もなく横に滑った。

数十人の人間がおりたたみ
心に前方のスクリーンを見つ
っぱいのスクリーンに
の記号や数字が映し出
れていた。
入口に近い壁にもたれている男に、
と、彼は黙って、右方の一団に向ってあごをしゃくった。
彼らが乗組員なのだろう。
フサは最後列の椅子に腰をおろした。
つぎつぎと立ち上っては質問がくりかえされ、そのつど、スクリーンの形象が変った。
そのスクリーンのかたわらに、演説台のような席があり、二、三人の士官が質問に答えていた。
入口に立っていた男が、フサの書類を持って演説台の士官の下まで進んだ。書類を受け取った士官が、ざっとそれに目を通し、それから、視線を回らしてフサをとらえた。
「船長。補充の甲板員が来た」
十数名がいっせいにふり向いた。
「補充員。立て」
フサはみなの視線の中で立ち上った。
測船《カサンドラ・プラス・ワン》の乗組員だ。
カラ・キタイ」
前列にいた剣闘士のような、真黒なたくましい男が船長であろう。フサは形どおりの挙手の礼をした。
音を立てるように、きびきびした礼が返ってきた。
「船内業務についてはあとで説明する」
それだけ言うと、彼も着席した。フサも腰を下した。
ふたたび質問と説明がはじまった。
フサは、これから運命を共にすることになる乗組員たちを観察した。太っているの。やせているの。肩幅の広いの。なで肩なの。髪が赤いの。銀色の。さまざまだった。制服の色もとりどりだった。
長いたいくつなミーティングはなかなか終らなかった。
観測船は、その船本来の乗組員のほかに、多数の科学者や観測技術者を乗せる。双方の間に、ほんの少しの反目や仲違いがあっても、長い航路の、せまい船内での生活や作業に、時に決定的な障害をもたらす。それがしばしば、船や乗組員の安全にまで影響をおよぼ

す。だから、ことに観測船の場合は、出発前に、念入りな会合をくりかえす。どこでどんな作業をおこなうのか？　その為に、船自体はどのような飛行をし、どのようなコースをたどるのか、双方に理解し、確認させる。観測隊の方は、観測船それ自体は、ただ自分たちを輸送するための手段であり、存在であると思っているし、観測船の乗組員は、船の安全が第一であり、場合によっては、観測任務など放棄するのは何でもないことと思っている。

観測隊は、目的の場所なり位置なりに到達しなければ意味がないと思っているし、船を動かす方は、そこへ行けなければ行けないでしかたがないだろうと思っている。

流星塵や磁気嵐。放射線雨。熱界や、正体不明の局所的空間のひずみなど、思いもかけぬ障害が船を待ち受けている。海上の嵐と違い、それらの規模は人の想像を絶するほど大きくかつ広い。ひとつの流星塵から抜け出すのに何十時間、何百時間とかかり、一瞬と思われる放射線雨でさえくぐり抜けるのに幾十日も要する。三億度Cもある熱界は、その空域に近づくだけで破滅である。

人類は、最新型のレーダーで、ようやく十光日の距離をさぐることが可能になった程度であり、十一光日の先には、いかなる危険が待ち受けているのか、全く予想もつかなかった。

未帰還になった太陽系外観測船の数は、決して少なくなかった。

昔のように、第一次だの第二次だのと、そのつど、探検隊のような覚悟と気負いで出発し、また送り出してやった頃と違って、今では、常時、何隻もの観測船がひっそりと、火星を木星を、金星を、出発して行く。

ふつう、太陽系外観測船と呼ばれるものは、太陽系から三十光日ぐらい離れたふきんまで進出する。地球と太陽の距離がほぼ八光分。冥王星と太陽の距離が、約七光時である。コースは、惑星の公転面に垂直方向だったり、あるいは水平方向だったり、そのつど異なる。

広漠たる暗黒の空間を飛行してゆく一隻の宇宙船は、あわれなほど小さく、まるで停止しているように見える。たとえ、光の速さの何分の一という、おそろしいスピードで飛んでいても、宇宙空間の、経度や緯度の、一分どころか、一秒も移動していない。

時間や距離の観念をはるかに超越した無限のひろがりの中では、光の速さでさえ、ほとんど静止しているのにひとしかった。

宇宙観測船が帰って来ないのはなぜなのか、見当もつかなかった。

むろん、遭難には違いない。だが、救助信号も送られてこなかったし、遭難位置を知らせるマーカーはおろか、難破を告げる船体の破片ひとつ発見されなかった。

すべての観測船のコースは、あらかじめきめられていたし、それをはずれる時は、いかなる場合でも、何種類かの通信方法で知らせなければならないことになっていた。

たとえ、それが十光日も、二十光日も進出していたとしても、その通信をキャッチする通信所や船が、どこかに、一カ所はあるはずだった。

宇宙観測機構だけでなく、連合も重大な関心を払っていた。観測船の遭難事故を解明できないということは、ひいては全宇宙船の運行に不安をもたらすということだった。そればかりでなく、観測船の安全性をはかり得ないとなると、〝宇宙に関する科学研究の推進〟という、例の『二一五〇年宇宙憲章』に基く宇宙開発の大テーゼがゆらぐことになる。これは連合の耐え得ないところだった。ましてつねづね、連合の中で、厖大な予算を湯水の如く消費すると批判されている宇宙観測機構が、たとえば連合文化会議とか、連合共通語委員会のような、あまり知る人もないような機関に、猛烈な攻撃を受けるはめになることはあきらかだった。誇り高い宇宙観測機構が、それに甘んじていられるわけがなかった。

彼らは、ようやく重い腰を上げて、相つぐ遭難事故の解明にのり出そうとしていた。

フサは膝に爪を立て、腕をつねり、必死に目をあけつづけていた。それでも何回か、意識が中断した。

たいくつな時間は、遅々として進まなかった。

宇宙観測機構からの参加組らしい、神経質そうな、いかにも学者らしい男がみなに向って何かしゃべっていた。いつの間にか、その男が、たくましい長身の男に変って、船内の秩序に関する演説をぶっていた。つぎに目をさましたときには、一人の女が前へ出て、パ

ネルをみなに見せているところだった。これは全く、意味がわからなかった。
「以上。解散！」
とつぜん、声が聞え、本能的に目をさましたフサは、みなと同時に立ち上って敬礼した。
にわかに人の渦でごった返した。
船長のカラ・キタイのところへ歩み寄ろうとしたとき、うしろから肩をたたく者があった。ふりかえると、ドアのそばに立っていた男が、目を光らせていた。
「おい。2級甲板員（セカンド・デッカー）」
腕も首も、人並みはずれて太い。両肩が盛り上り、太い首の回りの襟が細引きのようにひしゃげていた。
フサはその時、はじめて男の制腹の胸に、水夫長（ボースン）のバッジが光っているのに気がついた。
嫌なやつに呼び止められたな、と思ったときには、フサの腕は、万力のような手につかまれていた。格闘技の心得でもあるのか、つかまれた右腕は、全く感覚を失っている。
「ちょっとこっちへ来い！」
水夫長（ボースン）はささやくように言うと、フサを引きずるように歩き出した。抵抗するどころではない。
ほかの者が見たら、仲の良い二人組のように見えるだろう。水夫長（ボースン）はドアを開いて回廊へ出ると、向い側のドアを押し開いた。
フサの体を押して自分も入り、ドアをうしろ手に閉めた。
小さな会議室だった。
凄まじい打撃がフサの上体を襲ってきた。部屋の向う端まで吹き飛んでゆくはずが、右腕をつかまれているので、打撃のすべてを、体が吸収した。
気が遠くなった。もう一回なぐられた。つづけても、う一回。また一回。フサは何も考える気力も消え失せ、サンド・バッグのようにゆれていた。
水夫長（ボースン）はやがて満足したか、フサの体を手から離した。フサは床に崩れ落ちた。このような場合は、虚勢を張ったり、まだ余力のあるところを見せたりしてはいけないことを知っていた。フサは死んだ魚のように、床に横たわっていた。
水夫長（ボースン）は大きな作業靴でフサの顔を踏みにじった。フサは耐えた。鼻の骨が鳴った。歯が折れ、のどの奥にこぼれ落ちた。
水夫長（ボースン）はようやく足をのけた。彼の暴風のような吐

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb